

紹介

支那學雜草

加藤 肇著

加藤博士が從來我國の支那社會經濟史學界に盡された功績は大きく、その發表に係る大小幾多の關係論文は何れも後進を裨益するものであるが、他方之と共に博士が諸方面の求めに應じて新聞雜誌等に投稿し、或ひは講演等の爲にものされた専門の範圍外に互る原稿の類も數少くない。本書は是等の文章を一括せられたものである。

載する所二十五篇、長きも二十頁内外、短きは僅かに數頁の短篇物ではあるが、中に未發表の近作をも含む。是等の諸篇中劈頭の「南京懷古」から「南京城市の變遷」、「蘇州今昔」、「杭州雜記」、「武漢三鎮」迄の五篇は古記録等により都市の變遷を述べたもので、地圖や寫眞の類を數多く挿入して讀者の理解を援けてゐる。次の「江山勝覽圖」、「傳秋月筆楊子江圖卷について」、「仇英筆清明上河圖といはれる圖卷について」は、何れも繪畫を取扱ふたものであるが、畫風を論じたのではなく、殊に後二者は圖卷内の景物につき記録に據つて畫の内容、製作年代等を考へんとしたものであり、つゞく「城郭の話」と「北方の都市、特にその城郭について」の二篇は支那都市の特色をなす城郭についての平明な解説であり、「標局」と「西藏のキャラバンに就いて」の二小篇

に次ぐ「項羽の性格」、「張良下邳の説話」、「村甫」、「蘇東坡と李直方」、「都督張浚」の五篇は人物評傳ともいふべく、「門二題」は夫々天台山國清寺山門と長安春明門の二門を中心として畫かれた圓珍・圓載の遭遇、圓仁の長安別離の劇的情景を史實によつて想像した隨筆、「白帝の子赤帝の子に斬らる」といふ説話について」は

この説話を漢の高祖が當時流行の五行思想を利用して漢朝に對する人心の安定を計らんとして、流布せしめたと論斷したものである。末尾の六篇は支那及び支那史に就いての若干の問題に關するもので、先づ「古代支那人の國家思想」は受命革命説、正閭論等を解剖し、尙支那人の思想中に國家統一の欲求が古今を貫いて存在せる事を説いたもの、「支那の封建制度について」は中世歐洲等のそれと比較してその特色等を述べたもの、「科學の政治的意義」は特に人心收攬に科學の重大意義を認めんとしたものの、「支那に於ける個人と國家」は支那文化の個人主義的な事を述べてあり、また「經濟史上より觀たる北支那と南支那」は農工諸生産品の主要なものにつき、その生産の南北支那に於ける盛衰を述べ、經濟史上より南支那の發展を論じた興味ある篇、最後の「歴史より觀たる支那の統一と分裂」は支那の正常狀態が統一にあるか、分裂にあるかを考へ、それらを民族、地理等の方面から檢討し、更に兩時代に於ける情勢の相違を諸方面から考察したものである。

加藤博士はその専門たる社會經濟史方面でも世の多くの社會經濟史學者流と異り、地道に史料を探索蒐集し、確實な史實に據つて歸納的に理論を構成すると云ふ、着實な行方を執られて居る。

この「雜草」に於いてもよく博士の右の學風が反映してゐて考證的敘述が多く、引いて隨筆としては讀者に些か退屈感を與へる箇所がないではない。併し、それだけに理論は穩健妥當であり、末尾六篇の如きその説く所、必ずしも獨特嶄新なものでないとしても確かに一讀に値する所がある。これが大方支那に關心を有する人々の閱讀を奨める所以である。(昭和十九年十一月、生活社刊、二九三頁、賣價九圓二十錢)(藤原利一郎)。

ギリシア史研究 第三

原 隨 園 著

原博士が吾國西洋史學界の重鎮であることは今更言ふ迄もない。而もここ一兩年の間にギリシア史研究第一、第二を相續いて上梓され、その深く又廣いギリシア史研究の成果を發表して後進を教導されてゐることは周く人の知る所であらう。今又ギリシア史研究第三巻を公刊する。現代戰爭の必然的要請とはいへ、近時餘りにも理工科系書物の偏重されてゐる時、本書の上梓をみたことは文化系わけても吾々同學後進の者にとつて最大の喜びでなければならぬ。

擬本書はその收録された八論文、即ち——テセウス傳説考、ヘラクレスの問題、ヘラクレスの傳説、オルユムピア祭に於ける主神及びその他の問題、幸福の島、大地の力、ギリシアに於ける人口問題の一面に就いて、ディオヌソス精神——が既に示すやうに、それ／＼ギリシアの傳説・民衆的宗教の研究である。凡そ傳説の理解は民族の古代史を理解する第一歩であり、「民衆的信仰

は民衆生活の凝集である」。この博士の態度は、宗教を單なる教義史としてではなくてゾチアルレーとして研究すべきことを強調したトレルチを思ひ出でしめるもので、傳説・宗教を歴史的に研究せんとする者に正當なる道を示されたものと言はなければならぬ。所で傳説や民衆的宗教就中外來宗教は、時代と共に變形し發展する。随つてそれを眞に理解せんとするならば、可及的にこれを原初的姿に還元し、そこよりその發展過程を辿る方法がとられねばならぬ。そのためには民族の根源的な宗教・社會は勿論、他民族との關聯、民族の發展史全體が問題解明の背景とならねばならぬのであつて、眞に容易ならぬ仕事と言はねばならぬ。本書に收められた八論文をみるならばその微細に互る分析考證に於いて、右の如き學的要請が如何に美事に充たされてゐるかを知り、博士の探及の強靱さ、ギリシア史に關する知識の深さと幅とに、今更ながら敬服の念の禁じ得ないものを感ずるのである。

かくて本書はギリシア傳説・宗教史であると共に、ギリシア社會史でありギリシア精神史でもある。極めて多面的な内容をそれぞれの問題に壓縮統一された八論文を、ここに一々紹介することは到底不可能であつて、本書の眞價は一片の紹介文につきるものでなく唯讀者の味讀にまつ他はない。

近時世界史的關心の昂揚するにつけ、西洋史に對する關心も愈々高まりつつある。けれどもヨーロッパとは何ぞやの問題に對する解答の根柢には、その史的發展のそれぞれの段階に就いて研究された緻密な知識が横はつてゐなければならぬ。吾國西洋史學を